

書 評

平岡昭利 著

『アホウドリを追った日本人——攫千金の夢と南洋進出——』

岩波書店 2015年3月 212頁 780円＋税

本書は著者既刊の『アホウドリと「帝国」日本の拡大——南洋の島々への進出から侵略へ——』（明石書店）を¹⁾、一般向けに書き改めたものである。新書であるため、既刊書の内容をかなり簡略化した部分もあるが、一方で記述が充実し、全体としてより興味深い内容に洗練された。

この一見奇抜とも思える書名のとおり、本書はアホウドリの存在が日本の領土拡大の原動力となったことを、丹念な史料渉猟と分析により詳らかにしている。明治中期には、小笠原諸島のはるか沖合に浮かぶ孤島で、すでに日本人がアホウドリの捕獲に狂奔していた。その行動は、後にリン鉱の採掘へと目的を変えつつも、中部太平洋のミッドウェー諸島やウェーク島、南シナ海のパラセル（西沙）諸島・プラタス（東沙）島、さらにはパラオ諸島のアンガウル島を舞台に、第二次世界大戦の敗戦を迎えるまで続いた。

こうした日本人の海洋進出は、初期の冒険的企業家の単独行動から、軍を後ろ盾とした企業的行動へと変容し、まさに「帝国」日本の領土的拡大と歩調を合わせ、いやむしろその先兵の役割を果たした。

アホウドリは翼を広げると2mを超える、美しい羽毛をもつ鳥であるが、その優美な姿と、きな臭さがつきまとう「帝国」とは、多くの読者の頭の中ではなかなか一致しないのではないかと。さらに、本書に記載される疑存島や出稼ぎ労働といった言葉とアホウドリのイメージには、大きな違和感が感じられる。大体において、国際保護鳥を「撲殺」するとは何か。この三題噺のような言葉の断片が、著者の筆致によってすると結びつき、一種の謎解きの快楽を与えてくれる。瓢箪から駒が飛び出したような、思わぬ方向に話が展開する点は、本書の最大の魅力でもあろう。

本書の構成は以下のとおりである。

プロローグ

第1章 アホウドリを追って——「海の時代」

の到来——

第2章 鳥類輸出大国「帝国」日本と無人島獲得競争

第3章 糞を求めるアメリカ人・鳥を求める日本人

第4章 アホウドリからリン鉱へ——肥料・マッチ・兵器の原料を求めて——

エピローグ——アホウドリから始まった——

内容はおおむね前著と対応するが、本書では一般読者を意識してか、後半の第3・4章、とくに領土拡大や国家の介入に関する記述が充実している。以下、内容を瞥見したい。

第1章は、アホウドリを求めて南進する冒険的企業家たちの群像を、玉置半右衛門と水谷新六を軸に描く。玉置は八丈島出身の大工で、鳥島や大東諸島を開拓し、アホウドリ捕獲事業で巨万の富を手にした、明治立志伝中の人物である。水谷は、三重県桑名出身の貿易会社社員で、存在を信じられていたグランパス島探索の途上、1896（明治29）年に「偶然」南鳥島（マーカス島）を再発見した。両人の行為目的は、おびたしく棲息するアホウドリを捕獲し、羽毛を欧米に輸出することであった。アホウドリ羽毛は、帽子の羽根飾りなどとして高値で取引された。保存が利き、軽量で輸送が容易であることから、アホウドリ羽毛は日本の主要輸出品であったこともある。

位置すらも定かならぬ南海の孤島を発見し、アホウドリ捕獲を開始するには、外洋航行が可能な大型船舶を備船し、船員や労働者を雇用しなければならぬ。玉置らは、実態とは異なる事業計画を政府に提出し、補助金を引き出した。そのために、政府や時の知識人・実業家に働きかけ、世論の後ろ盾を得た。とくに『日本風景論』の著者として知られる志賀重昂は²⁾、新聞記事や自身の著作の中で、玉置の行動を壮図として褒めちぎり、南洋進出ブームを煽った。

また、外務大臣などを歴任した榎本武揚は、北海道開拓から南洋に関心を移し、南進論の中核を担った。榎本は南洋への植民を企図して、政治家・ジャーナリスト・文化人などを糾合し、1893（明治36）年に「殖民協会」を組織し、南洋開拓を支援する体制を作った。

明治政府は、南洋進出を国家事業とすることなく、民間人の野心を利用することで、伊豆・小笠原諸島周辺の島じまを領土に編入し得た。玉置ら民間人を衝き動かしたのは、アホウドリ捕獲によっての上がる、いわば「アルバトロス・ドリーム」であり、その夢を実現するため、彼らは彼らでしたたかに政府を利用した。

アメリカでは、西部開拓で需要が高まったリン肥料の原料として、グアノ採取がブームとなり、ゴールドラッシュになぞらえて「グアノラッシュ」と呼ばれた。著者はアホウドリ捕獲に狂奔する人びとの姿を、アメリカのグアノラッシュに対置し、「バードラッシュ」と名づけている。

この章はアホウドリが無人島開発と結びつき、血湧き肉躍る冒険譚の趣きである。玉置をはじめとする登場人物は、海千山千の策士であるが、ひとまずは憎めない人物として描かれている。

第2章は前章に引き続き探検物語であるが、場所を大東諸島および尖閣諸島に移し、さらには存在が疑われる疑存島までもが舞台となる。琉球弧への進出は、鳥島の噴火や、乱獲によるアホウドリの激滅に起因する。アホウドリは陸上での動きが鈍いため、棒で叩いて簡単に撲殺・捕獲できた。明治20年代には年間40万羽以上が撲殺されたといひ、棲息数が急速に減少した。

1900(明治33)年に大東諸島への進出を企図したのはまたしても玉置であった。しかし南北大東島には、予想に反してアホウドリが少なかった。玉置はさぞ落胆したかと思いきや、彼は八丈島や沖繩から労働者を集め、これらの島を国内に類を見ないサトウキビプランテーションの島として開拓した。同じ大東諸島の沖大東島(ラサ島)では、地質調査所元技師の恒藤規隆によって1911(明治44)年に設立された、ラサ島燐鉱合資会社(現、ラサ工業)が、リン鉱採掘を始めた。

アホウドリを求めた南進の前線は、琉球弧に沿って延長され、尖閣諸島に達する。1897(明治30)年に尖閣諸島の開発を事業化したのは、福岡県八女出身の古賀辰四郎である。しかしながら尖閣諸島のアホウドリも、資源量を顧みない乱獲により、数年のうちに減少し、その後はアジサシなどの剥製鳥捕獲とカツオ漁業が主体となった。

鳥島や南鳥島と同様、大東諸島・尖閣諸島は、当初国の所有であったため、開発・利用のためには長期の借用を願ひ出る必要があった。島の利用

権を獲得し、一攫千金を目論んだ事業家たちの熾烈な利権争いが、こうした冒険譚の背後にはうごめいていた。

ことは実在する島にとどまらず、存在が確認されていなかった島、そしてついには発見されなかった島にまで及ぶ。発見された島は国の所有となるが、その利用権は先願主義に基づき、発見者に与えられる可能性が高かった。そのため島の利用権を得ようと、虚偽の無人島発見を政府に届け出、まんまと疑存島の利用権を獲得する輩までいた。著者は疑存島の一つである中ノ鳥島(グランパス島)をめぐる、野心的な事業家らが繰り広げた行動と、それを煽る志賀をはじめとする知識人の無責任な言動を冷ややかに描いている。

アホウドリが激滅した明治期後半以降、事業家たちの行動圏は拡大するとともに、行為目的がグアノ・リン鉱・サトウキビ・カツオへと多角化した。初期の熱狂は、計算高くしたたかな行動に変容していった。

第3章の内容は日本領土を飛び出し、アメリカ領のミッドウェー諸島やウエーク島にまで拡大する。日本の事業家や出稼ぎ労働者の行動が、日米の外交問題に発展し、自然保護区の設定にまでいたるありさまが、主にハワイの新聞や外交文書によって解き明かされる。西部開拓による肥料需要の増大に応えるため、グアノを求めるアメリカと、アホウドリを求める日本の利害が、太平洋上でぶつかり合った。本書の記述は、それを穏便に収めようとする両国政府の駆け引きに及ぶ。

19世紀末、日本人はすでに北西ハワイ諸島にまで進出し、ハワイ政府に無許可でアホウドリを撲殺していた。1908(明治41)年、アホウドリを捕獲する出稼ぎ労働者が、パールアンドハームズ環礁に置き去りにされる事件が発生するにおよび、ハワイを併合したアメリカ政府はこれを問題視した。アホウドリ捕獲は居住を目的とした無人島への「先占」行為であり、アメリカの領土主権を脅かすものと認識された。

日本はミッドウェーやウエーク島に領土的野心を持たないことをアメリカに示す必要があった。南鳥島に水谷が上陸した4年後の1900(明治33)年に、アメリカ人がグアノ採取を目的に同島に赴いたことで、日米間に紛争が生じそうになった。この時にはアメリカが日本の主張に理解を示し、手を引いたことで、南鳥島の帰属が円満に決定し

た。この顛末に対する一種の交換条件が、ミッドウェー諸島のアメリカ帰属の確認であった。

島に置き去りにされた出稼ぎ労働者たちは、半死半生でアメリカ船舶に救助された。日本移民に対する反発が高まる折、ハワイの世論は反日的であった。救出された労働者たちは福島県をはじめとする農民で、多くはハワイにそのままとどまることを選択した。彼らは厳しい生活から抜け出すために海を越えて出稼ぎに来たうえ、命からがら助け出されたにもかかわらず、故郷を捨ててハワイに生きることを選択した。当時の農民の過酷な境遇は、無人島に捨て置かれるよりも厳しかったのか、と思わざるを得ない。

日本人のアホウドリ乱獲に手を焼いたアメリカ政府は、1909（明治42）年に北西ハワイ諸島に「ハワイ諸島自然保護区」を設定し、アホウドリ捕獲を全面的に禁じた。同保護区は、現在世界自然遺産に登録されているが、もともとは日本人を排除する手段として設けられたものであった。

国内資源が枯渇し、アメリカからも閉め出された日本人は、アホウドリを求めてとうとう南シナ海や南太平洋にまで進出した。第4章では、プラタス島に「小王国」を築いた西澤吉治と、リン鉱を確保するためにアンガウル島占領を主導した海軍軍人の秋山真之の行動が描かれる。

プラタス島には玉置や水谷も進出しようとしたが、実際の開発に成功した西澤は、台湾で軍に消費財を供給する商人として財をなした人物である。1907（明治40）年、西澤は八丈島・台湾・福建省から400人以上の労働者を雇用し、島内でのみ通用する私製紙幣まで発行して、プラタス島に「西澤王国」を築いた。しかし、西澤によるプラタス島開発は、清からは領土の不法占拠と受け止められ、王朝末期の混乱が続く中、清国内の反日感情が高まった。結局西澤はプラタス島から撤退せざるを得なかった。

日本人がアホウドリを求めて島に渡ると、アメリカも清も、決まって主権侵害を主張し、日本人を排除した。近代的な領域概念は、海を自由に駆け巡る人びとから見れば、迷惑な制約であった。

南洋諸島への進出は、第一次世界大戦の勃発による日本の対独宣戦布告により本格化した。海軍は1914（大正3）年8月の宣戦布告後、わずか1か月でヤルート島を占領し、その後ドイツ領南洋諸島全域を支配下に置いた。海軍の迅速な行動

は、当時リン鉱石の国内販売を独占していた三井物産と海軍の、周到な準備に基づいていた。海軍の秋山は、三井の山本桑太郎（後の満鉄総裁）、さらにはプラタス島を撤退した西澤と結びつき、パラオ諸島南部のアンガウル島でのリン鉱開発を計画した。とはいえ彼らのしたことは、ドイツが開発したリン鉱採掘施設を一方向的に接収するだけの、火事場泥棒のような行為であった。海軍の行動は、リン鉱確保を目的とした国内独占資本と結びついた結果であった。

アンガウル島のリン鉱をめぐるのは、ラサ島燐鉱会社の恒藤と秋山らの間に熾烈な利権争いを引き起こした。恒藤もまたアンガウル島への進出を企て、政界工作を仕掛けた。秋山・山本・西澤は、アンガウル島でのリン鉱採掘許可を取り消された。リン鉱採掘は海軍の直営を経て、国策会社南洋拓殖株式会社に引き継がれ、終戦を迎えた。

冒険活劇を読むような初期の鳥島・南鳥島開拓が、時間の経過とともにどろどろとした利権の対象となり、政治家・軍・学者をも巻き込んだ権謀術数の世界に変容していった。当初は島の領有にさえほとんど無関心だった政府が、領土的野心を抱いた20世紀初頭から、アホウドリ獲得の狂奔に関与していく。挙げ句には海軍を派遣し、実力で島を占拠するところまで行き着いてしまった。

ハワイにおける領有問題と、プラタス島占拠を契機とした反日運動は、日本人の南洋進出が近隣諸国を刺激する国際問題であったことを如実に物語る。アメリカは日本人のアホウドリ捕獲を排除するための方便として、自然保護区を設置せざるを得なかった。さらに南洋におけるリン鉱の争奪戦は、南洋進出の動機が軍需物資であるリンに移行したことで、軍が行動に参画する余地を与えた。一連の経過には、ヴェルヌの『十五少年漂流記』が、いつの間にか、かわぐちかいじの『沈黙の艦隊』にすり替わったような錯覚を覚える。

アホウドリとそれを追う人びとの行動は、帝国日本の空間的拡大に利用された。現在の日本は南洋諸島を放棄したが、それでも西部太平洋の広大な海を排他的経済水域としている。それはアホウドリに憑かれた人びとが、散在する島じまを開拓し、領土を押し広げた結果である。

海を舞台とした壮大なストーリーを、アホウドリを糸口として描いて見せたことが、本書の最大の特徴である。著者はこの物語を紡ぎ出すため

に、あっちの図書館、こっちの公文書館、さらには南の島じまに足を運び、小さな記録の断片を拾い上げ、それらを丹念につなぎ合わせる作業を20年余にわたって続けた。その情熱と粘り腰にはただただ敬服する。同時に、オーソドックスな歴史地理学の方法論に依拠することで、かくも魅力的な語りが可能であることを改めて認識した。

著者が本書の母胎となる研究に着手したきっかけは、アホウドリそのものに対する関心ではない。南大東島の隆起サンゴ礁の急崖を見上げ、誰が何に衝き動かされてこんな断崖をよじ登って、ここに暮らそうと思ったのか、という、地理学者らしい疑問が発端であった。南大東島が八丈島と結びつき、玉置半右衛門というキーパーソンの存在が浮かび上がり、彼がアホウドリ羽毛で富を築いたことに行き当たった。アホウドリが、1200kmを隔てた二つの島を結びつけたことに、誰よりも驚いたのは著者であろう。

南大東島が八丈島からの移民によって開拓されたことは、『南大東村誌』その他の文献に詳しい³⁾。両島の関係だけに著者の関心が膠着していれば、その後の研究の発展はなかった。しかし著者は、アホウドリを求める情熱が玉置個人のものとは考えず、また目指す島は南大東島だけではなかったことを予測した。人物にとどまらず、地域を視野に入れることができる地理学者ならではの発想法が、ここに見て取れる。

著者は研究の歩みを遅々としたものと謙遜するが、水谷新六・古賀辰四郎・西澤吉治といった、行動力にあふれる事業家たちを次々と発見し、彼らの足跡を丹念に追うことで、帝国日本の空間が南に向かってぐんと拡大したことを実証した。

そしてアホウドリ捕獲が、次第に国家的な野望に結びつき、学者や政治家を巻き込むうねりとなって太平洋を押し渡ったことに、一連の流れのさらなる展開を見いだすことができる。このうねりは帝国日本の植民地主義に同化し、ついには日本全体に破局的な悲劇をもたらした。

いま、これらの南の島じまを見るとき、その穏やかな風景に心癒される人びとは多い。しかしその背景には、戦争の惨禍のみならず、アホウドリやリン鉱を求めて、命がけで海を渡った人びと、さらには置き去りにされた人びとまでもがいたことを、著者の一連の研究で知ることができた。

しかしこうした南洋進出の過程は、アホウドリだけに見られるものではあるまい。奄美・沖縄から台湾・フィリピンを通して南洋諸島に到達した、カツオを追った漁業集団が存在した。本書でも触れられるサトウキビプランテーションは、南北大東島を起点に、台湾から南洋へと拡大した。それらとともに、沖縄・九州・瀬戸内の島じまからは、新たに領土化された島じまへ、出稼ぎや移民として多くの人びとが渡った。アホウドリは南進のパイオニアとしての役割を果たしたが、それに続いてさまざまな資源を求めた日本人の活動が、西部太平洋地域に展開した。これらに関する調査研究は、移民研究の分野などで進展しているが、アホウドリと同様の文脈で、今一度包括的に検討する必要がある。

近年、近隣諸国との間で高まる領土をめぐる軋轢のなかで、国土縁辺に分布する離島に対する関心も高まっている。本書に取り上げられる尖閣諸島は、まさにその焦点である。感情的なナショナリズムに基づく、無根拠な応酬や挑発的な行動が国家間で交わされ、世上にはさまざまな言説が流布されている。本書は一步間違えれば、国内のナショナリストたちの主張を補強する道具ともなりかねないが、それは著者の本意ではあるまい。本書が明らかにした事実は、そのような雰囲気に対して、「まずは落ち着いて事実を見よう」と諫めているようにも読める。

評者は著者と同じく島を研究対象とし、学会の折など親しく話すものであるが、著者の広範な視野と、研究に対する旺盛な意欲に、常日頃から多くのことを学んでいる。離島の研究は老成した研究者の趣味とみなされがちであったが、近年では著者の活躍もあり、地理学分野で島を専門とする若い研究者が多く育ちつつある。よき先達に導かれて、離島の研究がますます盛んになることを祈りたい。

(須山 聡)

【注】

- 1) 平岡昭利『アホウドリと「帝国」日本の拡大—南洋の島々への進出から侵略へ—』明石書店、2012。
- 2) 志賀重昂『日本風景論』岩波書店、1995。
- 3) 南大東村役場『南大東村誌』1966。